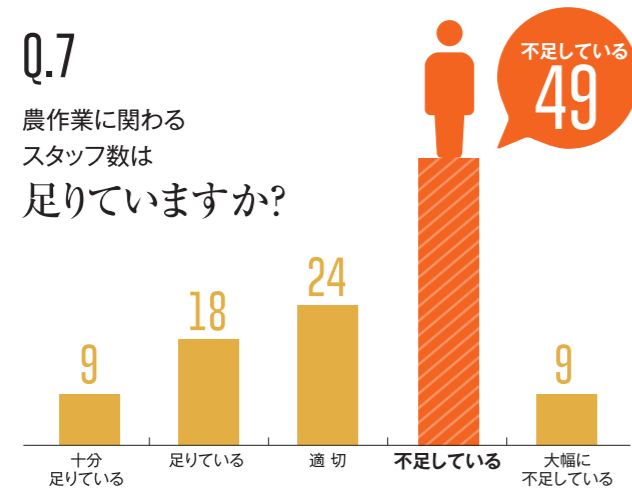


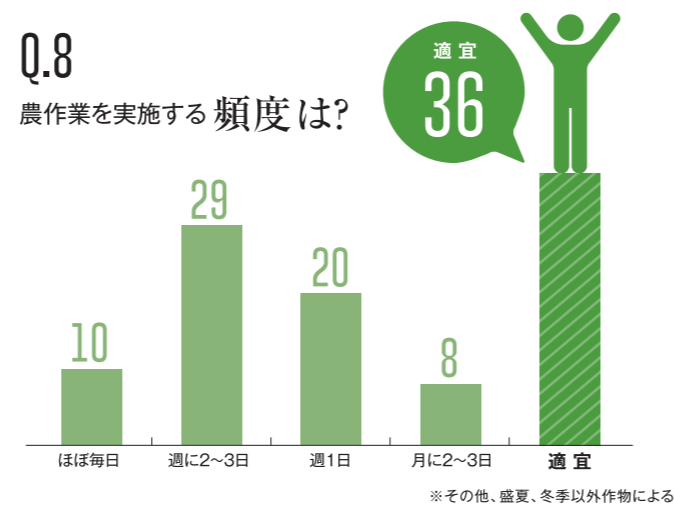
Q.7

農作業に関わる  
スタッフ数は  
足りていますか?

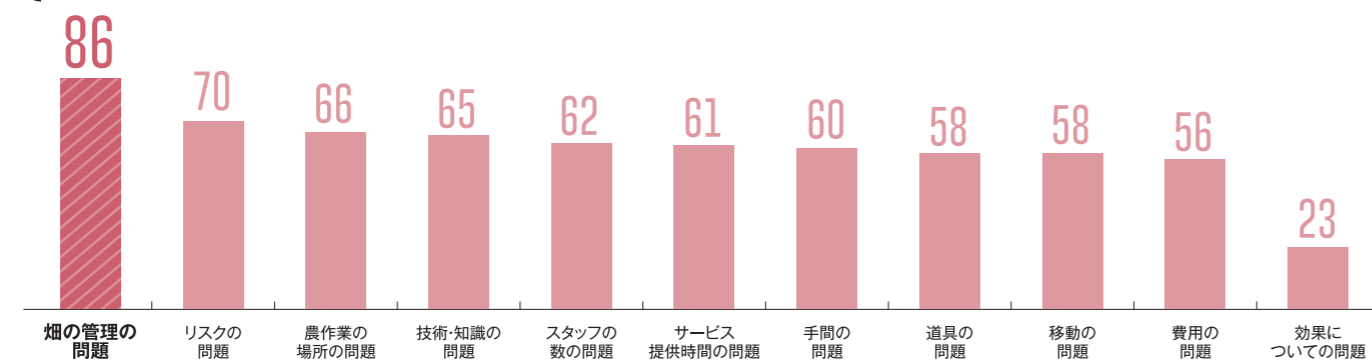


Q.8

農作業を実施する頻度は?



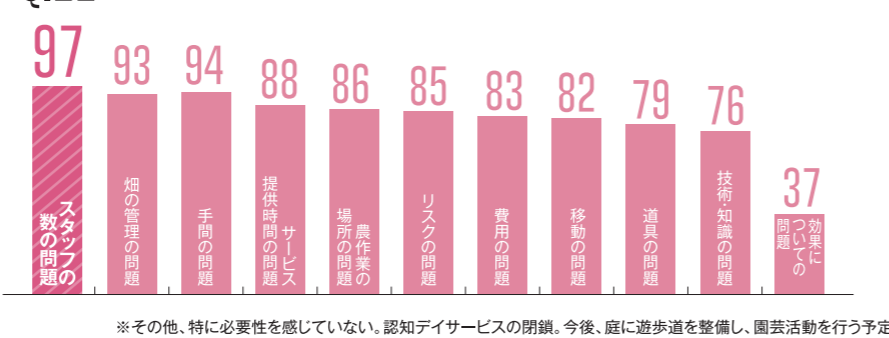
Q.9 農作業を実施する際の課題は? (複数回答)



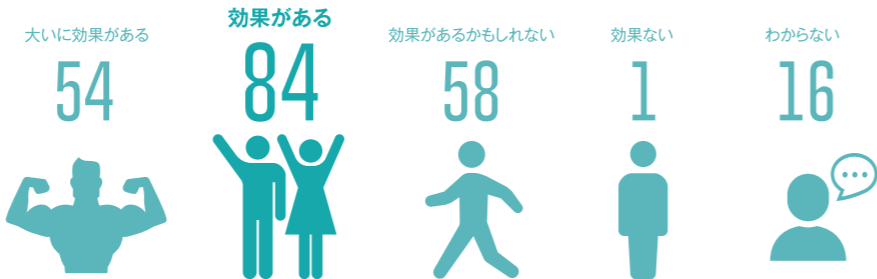
Q.10 農作業を今後も  
継続しますか?



Q.11 農作業を行っていない理由は? (複数回答)



Q.12 リハビリテーションの1つとして  
農作業を  
活用する効果は?



**結果**  
滋賀県内の医療機関や介護施設で農作業を活用している事業所は約34%で、利用者へのアクティビティや生きがいの創出として活用されていましたが、社会参加支援としての活用はあまりされていませんでした。実施している施設も多くは、リハビリテーションの一つとして農作業を活用する効果を感じており、今後も継続したいと考えていました。一方、実施していない施設も多く、「畑の管理や場所の問題」「利用者へのリスク」「スタッフ数不足」などの課題もあることがわかりました。これらの課題を解決し、利用者の自立や社会参加へ向け効果的に農作業を活用したい事業所が実践できるよう、作業療法士などの専門人材の活用やその地域にある資源との連携を進めていく必要があります。

# 医療

| CASE.01 | 近江温泉病院

## 医療領域での農作業(園芸)の活用例



### その人らしさを支える農作業

**聞き手(以下:聞):**「医療現場での農作業や園芸の活用についてどのようにお考えですか?」  
**近江温泉病院(以下:近):**「リハビリテーションは、患者さんが暮らしていた地域の中で、その人らしい生活の再建をお手伝いする仕事です。当院がある東近江市の患者さんは、農作業に関わっていた方が多い。つまり、病気や障害があっても少しでもそのような活動に参加できる機会があることが、その人らしさに繋がると思っています。当院では、そのような介入を得意とする作業療法士が中心となり、農作業を

使った介入を行っています。例えば、病気や障害によって、なかなか自分の気持ちを表現し難い方の為に、思いを表現する仕掛けとして目につきやすい所にプランターを置いています。」  
**聞:**「なるほど。その仕掛けからどのようなことが生まれましたか?」  
**近:**「昔に畑作業をしていた脳血管障害の患者さんがいました。作業療法の中で一緒に農作業をやってみよう」という話になりましたが、家族は大反対。家族は畑作業よりも自宅で静養して、安全・安心に暮らして欲しいと望んでいたのです。患者さんもそんな家族の想いを感じており、農作業を楽しみたいけれど、家族には「申し訳ない気持ち」を持っていました。作業療法士はそのような患者さんの気持ちを汲みながら、一緒に園芸活動に取り組みました。すると、患者さんの園芸に取り組む姿を見ていく中で、徐々に家族の考えに変化が生じてきたのです。家族が植物を育てる患者さんの姿を実際に見ることは、家族が本人の想いを知ることにも繋がります。家族が本人の想いを理解してくれることによって、次第に患者さんの

気持ちにもゆとりが生まれ、患者さん自身の意欲も変わってきたのです。その時に育てたのがこの唐辛子でした。」



**聞:**「医療の中で、農作業や園芸を実施する課題はどのようなものでしょうか?」  
**近:**「患者さんの地域での生活の再建を考えると、その方が慣れ親しんだ作業を活用することは当たり前のことだと思います。しかし、昨今の病院(医療)でのリハビリテーションは、感染症の問題やパターン化された基本動作の再獲得に重点をおいています。医療の中でも、一人一人の地域生活を見据えた介入を早期から実施していくことが大事だと思っています。」

#### 近江温泉病院 総合リハビリセンターでの取り組み

- 具体的な農作業…プランター園芸・畑の散歩
- 特徴(リハの目的)…患者さんのこれまでの生活を知る・園芸を通して意欲の改善や自立を助ける
- 実施時期や頻度…患者さんや植物に合わせて随時実施
- 課題…退院後の農作業の再開の支援までは、入院中だけでは十分に出来ない

近江温泉病院 総合リハビリテーションセンター

[滋賀県東近江市北坂町966 / TEL:0749-46-1125]

「人にやさしい病院をめざして」を理念に、回復期リハビリテーション病棟、医療・介護療養病棟、訪問リハビリテーション、通所リハビリテーションを通じて、様々な地域ニーズに広く応えるサービスを提供。